

# 教 仏 名 聞

第46号  
(発行日)

2014年7月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488

(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。
- 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日午後3時始
- 〈聖典学習会〉  
毎月6日午後7時始。
- 〈真宗入門講座〉  
毎月18日午後6時30分始。
- \* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# 弥 陀 成 仏 の こ の か た は

弥陀成仏のこのかたは  
いまに十劫をへたまえり  
法身の光輪きわもなく  
世の盲冥をてらすなり

(現代語訳) 弥陀が成仏されてから、既に十劫を経て現在し給う。清浄な仏身の光明はあまねく暗愚の者を照らされる。

(語句)

弥陀成仏―弥陀が本願を成就し仏になる。  
十劫―一劫は、たとえば四方が一由旬(二里)ある蔵の中の芥子を百年に一度一粒づつ取り出して蔵が空になるまでの時間。時間の最大単位  
法身―生死の苦を離れた清浄の仏身。  
盲冥―愚かで智慧のないもの。

○ このご和讃は『浄土和讃』の中の「讚阿弥陀仏偈和讃」の最初の和讃です。「讚阿弥陀仏偈和讃」は、七高僧のお

一人である曇鸞大師(四七六)

「讚阿弥陀仏偈」を基にして、親鸞聖人が和讃されたものです。この和讃は真宗門徒の方にはよく知られた和讃です。

最初句の「弥陀成仏のこのかたは」とは、『仏説無量寿経』によりますと、法蔵菩薩が一切衆生を仏にしたい、まことの幸せを与えたいという広大な願いをおこされ、ひとり一人を仏にするために私たちにひとり一人代わってご修行して下さい。そして間違ひなく疑ひなく一切衆生を仏にすることができるといふ見通しがたつて、法蔵菩薩は阿弥陀仏に成られ、それからもう十劫の時がたつて今に至っている、と釈迦如来は説いて下さったのです。

「今に十劫をへたまえり」とは、十劫の昔に法蔵菩薩が一切衆生を仏にしたもう不可思議な力をすでに成就して、現在ただ今に働いて下さ

り、私たちひとり一人に「救い」を告げて下さっている、有難いではないかと、聖人は仰せられるのであります。

十劫の昔に法蔵菩薩は一切衆生を助けたもう阿弥陀仏に成られた、ということが単なる、昔の昔のできごととして回想されているのではなくて、「今に」というところに、我が身のいる現在の上

に、法蔵菩薩の御苦労とその成就による救いを有難いと味わっておられるのです。お念仏となつて私に現れて下さっている本願成就の南無阿弥陀仏の御恩を「現在に」深く感じておられるのです。

この味わいについて、松並松五郎さんの話の中に、

私宅の御縁日に、眞弁の師が親子連れで御来縁下さいました。後でぜんざいを召し上がって頂きました。後日お礼に「思い出しますせんざいの味」と書いてありました。返信、同時に頭にひらめき、そのままお便り出しました。「今に思い出しますせんざいの味」と。

「今に」と言う場合は、後日頂いたぜんざいの味が今でも生きている時になる。

「弥陀成仏のこのかたは今に十劫をへたまえり」、昔の御苦労が目の前に浮かんで来ることになりました。南無阿弥陀仏

とあります。以前にいただいたぜんざいは美味しかったという過去の話ではなく、現在に至つてもいただいたぜんざいの味が忘れられなくて今も

## 《 盃 蘭 盆 会 法 要 》

八月十日(日)

午後二時始まり

- \* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。
- \* 八月十二日と八月二十二日の集まりは**ありません**。
- \* 八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)は**あります**。

味わっていますという、そういう「今に」が「今に十劫をへたまへり」の「今に」ですよ、というお話です。単なる過去の追想ではなくて、現在に、法蔵菩薩が阿弥陀仏に成られた御恩をいきいきと感じておられるのです。

ここで十劫の昔に法蔵菩薩は本願を成就されて阿弥陀仏に成られたという、その十劫の昔という過去の長さは、歴史年表に表されるような千年、二千年前というような時間軸での昔ではなくて、現在という「時」にすでに成就している思議を超えたできごとを「十劫の昔」という無限の過去性で表されるのでありましょう。歴史的な時間を越えて成就しているできごとを過去の過去として表されるのではないのでしょうか。

話は変わりますが、真宗門徒であった小林一茶の句に  
すずしさや  
弥陀成仏の

このかたは  
というのがあります。「すずしさや」というところに一茶は、火宅無常の世に生きる者に、涅槃（浄土）からの涼し

い風を、「弥陀成仏」の仰せの上に味わっている趣があるように思います。

「弥陀成仏のこのかたは」は「弥陀となつてすでに成仏しておられる」ということですが、このことは「喜んでいい、あなたの救いは今すでに成就されている」という告知なのです。

これから私の救いを探し求めるというのではありませぬ。凡夫は自分の救いが何処にあるのか、何が救いなのか、救われたらどうなるのか、救われるにはどうすればいいのか、凡夫には分かりませぬ。どこに真実があり、どこに私を満たしてくれるものがあり、どこにまことのやすらぎがあるのか。それが分からない。分からないゆえ、あちこちと迷いに迷っているのです。

もともと「迷」という字は、「米」書いて、辶偏ですが、  
とという字は、走るという意味があるそうです。米という字は、六つもの方角を表し、あちらこちらの方角を表すイメージで、「迷い」とは、あちらこちらと米食うて走り回っていて、行ったり来たりしてただで、助かる道がつか

ない状態を表しているのだと、先輩から聞かせて貰ったことがあります。そうですね、凡夫は、ただただうろろしているだけで、生きてはいるけれどもそれが確かな方向への歩みになっていない。漂（ただよ）い流れているだけなのであります。

また、たとえ助かる方向が分かって歩み始めても、まことの幸せに至りつくことがはなはだおぼつかない。真言宗や禅宗や天台宗の道は、真実をさとの道であり、そのための自力の修行ですが、この道で真実を覚る修行、いわば自らの力で悟りを実現するため修行は厳しく容易ではありません。親鸞聖人は、二十年間、天台宗の修行に励まれましたが、自力の修行を成就することは不可能であると断念されました。

ですから私たち凡夫は、真実がどこにあるのか、どこに求めればいいのか、分からなればかりか、たとえ方向が分かったとしても、そこへと至る道を歩むことは困難、というよりは不可能なのであります。

ところが「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり」というのは、私を救いたもう功德力をすでに成就された阿弥陀仏が今ここに来て下さって、ナムアマミダブツと喚びかけ下さっている。そのことを釈迦如来は『仏説無量寿経』にお示し下さいました。

どこに真実があるか分からない私に、真実なる阿弥陀仏が、私が求める前にすでに私を求めてきて下さっており、私が真実を実現したいと思う前に真実そのものがすでに来て下さって、喚びかけておられる。その声が私たちに称えられ、耳に聞かしめられる南無阿弥陀仏のお声であります。

このような驚くべき恵みが一切衆生の上に働きかけおき、人はその恵みをそのまま受けとりさえすればいい、聞き受けさえすればいいのであります。

この有難い真実はだれも知りませんでした。しかるに釈迦如来の御苦勞（修行と正覚と説法のご生涯）によって、阿弥陀仏の普遍的で不可思議な恵みを釈迦如来は感得され、私たちに知らせ下さつ



たのです。それが『仏説無量寿経』です。聖人はこの經典を

「それ真実の教を顕さば、すなわち大無量寿経これなり」

（教巻）

と讃仰しておられます。この經典に説かれた真実、これが浄土真宗であります。

ですから浄土真宗は、この世の思想家や学者や博士などが自分の知恵を駆使して考え出した教えではありません。この上ない悟りを開いて真実を覚（さと）りきつたお方（釈迦如来）が感得された、一切衆生の助かる真実なのです。

ですから浄土真宗を聴くときは、へただの人間の語り〜のように聴くのではなく、悟りの世界から現れ出てきた言葉として敬い、謙虚に聞かねばいただけません。私たちがなかなか道が見出せないのは、覺られた仏陀の言葉に対する信頼が無いからです。へ自分は物事をよく分かって〜という傲慢（きょうまん）な心で真宗の話を聞くからと

もいえます。まことに「渴仰の思いで仰ぎ聞く」べき教えです。

さて、南無阿弥陀仏は「汝をまるまる引き受けて浄土に連れていく」「助ける」の仰せです。このように阿弥陀仏は私に働きかけ、私に喚びかけておられる。その働きは光明と名号で一切衆生に働きかけておられる。それが「法身の光輪きわもなく、世の盲冥をてらすなり」であります。

〈法身の光輪〉とは阿弥陀仏の光明のことです。法身とは「法は眞実、身ははたらき」のことで、眞実なる働きのこととです。「法身の光輪きわもなく」で、その光明はあらゆる領域にどこどこまでも至りてきわまりがないといわれています。

「世の盲冥をてらすなり」の世とは世間のこと、迷いの世界のことです。その中にいる盲冥とは私たちのことで、眞実を見開く眼もなく、眞実を見失って暗闇を彷徨しているような姿をここでは〈盲冥〉と教えて下さるのです。

私は一体どこからこの世に来て、私はなにものであり、私はこの世で何をしようとし

ているのか、またこの世が終わればどこへいくのか、そういう生存の根本問題について、何も分かっていない、全くの無知であり、心暗き者が私たちです。それをここで盲冥といわれるのであります。

聖人は「世の盲冥」について「世のめしむくらきもの」と左訓（注）をつけておられます。眞実が見えない迷妄の姿です。

では私たちが南無阿弥陀仏をいただと、私はどこから来て、私はなにであり、私はどこへいくのか、それらが分かるのかどうかを考えてみたいと思います。

まず私はどこからこの世へ来たのか、そして私は死してどこへいくのか。それが南無阿弥陀仏をいただと分かるのかというと、どうでしょうか。依然として私には分からないのではないのでしょうか。しかし、それは私たちに分からなくてもかまわなにのです。

はかりなきいのちと光の阿弥陀仏が私のいのちの親となり、主体（あるじ）となつて下さっていること、そのこと

がほのかにも知られてくると、その阿弥陀仏に今乗せて下さっていることがお念仏において知られてくるのです。そしてそれで十分満足なので

私はどこから来たのか、私の判断ではとても分かりません。また私はいったいどこへ行くのか、それも私の判断では分かりません。

しかし私を乗せたもう阿弥陀仏は「必ず浄土へ連れていく」（若不生者不取正覚）と仰せ下さっている。南無阿弥陀仏は「浄土へ生まれさせる」と仰せ下さるお誓いの言葉です。

それを聞く私は「ああ私は、自分ではどこから来たか、またどこへ行くのかまったく分からないけれども、阿弥陀様は私を浄土という安らかな領域へ連れて行って下さる。有難い」と、仰せのままを聞いていけばかりです。それでまったく不足はないのであります。私の生存の大問題は阿弥陀仏が引き受けて下さるのであります。

また「私はなにものか」は知らないけれども、私は阿弥陀仏によって助けられねばならない存在であり、阿弥陀仏

に離れない存在であり、阿弥陀仏の御恩を受けているものであり、阿弥陀仏の眞実を証しするように促されているものであること、それが知られます。この世に生まれたのは量りなき眞実（阿弥陀仏）にあうべく生まれ、眞実を証しする人生だと知られてきますから、大きな生き甲斐が与えられます。

それと、「世の盲冥をてらすなり」ということですが、盲冥で「めしむくらき」私たちが、いわば眞実を見る心の眼が閉じられて、暗闇の中にいるような私たちが、どうして私たちを「（阿弥陀仏が）てらすなり」と分かるのか、ということですが、智慧の眼がなく見えなくても、「照らされてい」ことは分かります。

〈南無阿弥陀仏〉と聞こえて下さるからです。南無阿弥陀仏のお念仏は、阿弥陀仏が「ここにいますよ」「お前を助ける親であるよ」と仰せ下さっていることですから、お念仏の声を聞くことが「ああ私とともに阿弥陀様がいて下さり、私にはたらきかけて下さり、導いて下さっている」と知らされるのです。

また「私はなにものか」は知らないけれども、私は阿弥陀仏によって助けられねばならない存在であり、阿弥陀仏

西脇善桂師は

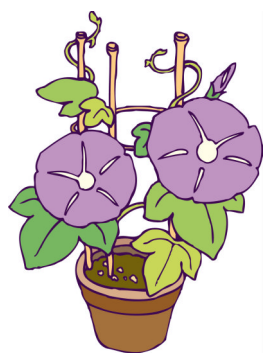
「眞実の親に遇ふたと云ふは、盲人の、人に遇ふたと云ふやうなあひよふである。只向ふより言葉をかけられた丈、見たのでも訳つてからでもない、お聲をかけられたままで、遇ふたことになったのじゃ」と仰せ下さっています。

それが「（阿弥陀仏は）てらすなり」なのであります。

見えなくても名号（名声）を聞くことによつて、知られるのです。目の見えない子でも親が傍（はた）について下さることは「坊や」と喚ぶ親の愛の声によつて親にあつてい

迷妄で閉じられた眼が完全に開くのは浄土に至つて大般涅槃を覚る時といわれています。この世では、阿弥陀仏のお照らしの光は、眼に見えないままで、阿弥陀仏の喚び声（お念仏）で知られるのです。

（了）



# 木村無相さんの法信 22

(五十八年九月八日付けのおたよりの前号からの続き)

それで、もう十二、三年も前の『念仏詩抄』29ページに、そのことを大体、

ご信心

「大信心は  
私に信ずる  
それでない  
「大信心は  
仏性なり  
仏性すなわち  
如来なり」  
如来の智慧を  
たまわりて  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

29ページ

信 信 信

大悲の願心  
それこそが  
信——

信 信 信

信

と、その  
当時、  
感じら  
れてい  
たまま

を「念仏詩」として書いたのでありまし  
た。

よくまあ、(一)まで体感させていただ  
いたことで、ありがたいことですねエ。

○

信心は如来のもの

如来の心、大悲心、  
お約束のことが信心。  
佛心のホカに信心なし。

つれていける

導いてやるこのお約束

丁度、親が、メワラの子の手を

ひいて下さって、我が家につれて

帰(てとる)てい

親の導きの手が、

念仏ともいだけられます。

とあるが、『真信尼物語』

六二。手を握られたのじや

香樹院師、ある時、真信尼に対しての

仰せに、

『少しでも後生の一大事ということの  
思い知られて、念仏申すようになったの  
は、如来様に手を握られたのぢやぞよ』  
と。

とあり、ワレワレが、「生死出離」が  
いささかでも問題になり、その上、称名  
念仏までするようになったのは、自分で  
は、気がつかぬが、「如来様に手を握ら  
れた」からのことであり、こうして如来  
様に「ナンマンダブツ ナンマンダブツ」  
と手を握られたからには、如来様のつれ

ていつて下さるところに、行くホカは無  
いのでありましょう。

○

紀さんのお手紙の(二)は

信心は如来さまのもの、如来の心、如  
来の願心、大悲心、お約束の信心、佛心  
のホカに信心なし

でしたねエ。紀さんの手紙の通りです  
ねエ。

信心は佛心そのもの、如来そのもの

なんですねエ。

「佛心とは大慈悲これなり」とある「佛  
心」そのものが、「如来そのもの」が向

こうから、濁悪迷妄のワレラの凡心、ワ  
レラと一つになつてはなれないで、日々  
夜々、ねてもさめてもへだてなく、「大  
悲無倦照我」と、ハタラキにハタラキた  
もう。

如来の、この身、このころ、このく  
らしに日々、生きてハタラキたもう、そ  
の如来、仏心が「ワレとはなれず、ハタ  
ラキたもう」、その生きたオハタラキを、  
「真実信心」というのである。

九月八日(木)ゴ四時半、

太子園に夕食に

(了)

## 《真宗入門講座》

毎月十八日(午後六時半始)

担当 (副住職) 土井尚存

(家庭でのお勤めの練習と御仏事の作法、真宗の教えを初歩  
から学びます。テキストは「歎異抄」で、寺にもあります。)

## 《二〇一三年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名——(敬称略) 青木宏克 赤股一夫 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 石田豊  
司 石田君代 石川紀美子 井上猛 井上守 岩谷龍 岩田能一 植田節美 宇田瑠璃子  
小澤ちづ子 香川郁夫 角谷節代 加藤忠 鹿島イフ子 笠井慶子 川端靖雄 窪ナル子  
児玉慶子 佐藤孝幸 塩濱小代子 下野誠二 下野知恵子 城越洋一 新保弘吉 寿賀晴  
剛 鈴木嘉子 高橋志美子 谷村往世 津田元親 寺坂典子 土居令子 長井一江 中野  
タカ子 中村喜保枝 中村幹夫 中村ソヨ子 中村タエ子 中村康義 中村千和男 中村  
頼子 中村暢明 中村穂積 中村ホミ子 中村美重子 中村美登子 中村實 中山緑 七  
村文子 西塚祥子 西山忝夫 能戸昇志 野原佳子 泰京子 長谷川満 濱秀子 原崎佳  
子 早川森弘 林久司 福井靖弘 福村義明 前田ふくの 町百合子 町嘉嗣 三宅真知  
子 宮伊勢子 宮野勲 宮野エイミ 宮野道子 室塚良治 森和子 森野茂治 山下悦子  
山下博愛 山下東洋栄 山下征洋 山科春良 吉田徳子 横田ミチ子 吉岡正人 吉ノ  
蘭陸枝 亮木与志、の皆様方より御懇志を賜りました。  
\*総額二二〇〇〇〇円になりました。ご本山の真宗大谷派(東)本願寺の  
方に納付させていただきます。有難うございました。

